

毛利市三郎領分海 (1)

山本 保

(会員 佐伯市池船町)

これより、細川肥後守(熊本藩主)領分。佐賀関まで五里。

○毛利市三郎

佐伯藩二万石・第三代城主 毛利高尚。

寛永一〇年(一六三三)就任。

寛文四年(一六六四)没。

一 鳩浦の港、保戸島より海上二里。

この港の口、長さ一〇町、この間に島あり。

岸深く、潮の満干にかまひなく、船かかりよし。城

下より海上八里。

これより、稲葉能登守(白杵藩)領分。

長目(津久見市)の港まで、海上三里。

鳩浦(現在・津久見市)は、四浦半島にある港の一つです。

一 佐伯城下より北三方は、保戸島(現在・津久見市)

港まで、海上七里。

この港の幅一町、長さ三町。岸深く、潮の満干かま

ひなく、潮かかり吉。

大風などに、船かかりならず。

港の口、申酉(さる・とり)にむかい、西風悪(あく)なり。

この保戸島の港の沖に、高甲(津久見市)と申す灘所

あり。船かかり八七間あり。

高甲より沖へ、瀬底一里半あり。

北の方に無垢島(現在・津久見市)と申す島あり。保

戸島より海上二里、この無垢島まで、市三郎領分。

津久見市の保戸島・無垢島・鳩浦は、四浦半島含め

て、佐伯藩の領分でした。  
津久見村組大庄屋

津久見浦組大庄屋

鳩浦・保戸島・落の浦の庄屋

津久見村組の彦の内・中田・西野内・千怒・奥河内の小庄屋

津久見浦組の本田・井無田・日見・福良・網代の小庄屋

#### 計一五名

一二代佐伯藩主・毛利高謙に、御目見を許されて三の丸御殿で、新年の御挨拶を申し上げています。年始の御挨拶のできることは、平民の一大名誉でした。

佐伯史談会・常任評議員の宮下良明さんは、「研究、佐伯の殿様浦でもつ(高政)編」で、「初代・毛利高政の知行高は、二万石の小藩であったが、豊後水道に広がる領海は、津久見・無垢島以南蒲江・深島まで、日豊海岸の大半を、支配権に置いた。(佐伯の殿様浦でもつ)と云われる所以には無尽蔵とも云うべき、海の資産の背景があり、一説に、十万石の格式を持っていたと云われている。」と述べています。

ちなみに、六代藩主・毛利高慶は、対馬・宗氏(一〇万石)より、夫人をおむかえしています。

一 佐伯城下より辰巳(東南)の方は、松浦郷(現在・鶴見町)の内、中村(佐伯市)も港まで、海上二里。

港のはば九里。長さ一二町。

この港、岸深く、潮の満干にかまいなく、何風にても苦しからず。船かかりよし。

港の口、亥(北西)の方にむく。

沖に島(八島)あり。

港の口より、島までの間、二町あり。

八島(鶴見町)。

この鶴見半島には、桑野浦・大島・丹賀浦・日野浦・吹浦・地松浦・沖松浦・帆波浦・鮪浦・羽出浦・中越浦、そして梶寄浦など、一二人の庄屋が住んでいました。

昭和五六年、県道がやっと開通し、下梶寄浦まで、車で行けるようになりました。陸の孤島から脱却することができました。

同年九月二十九日、第一回全国豊かな海づくり大会(豊漁祭)が、皇太子御夫妻(現在、天皇・皇后両陛下)をお迎えして、鶴見町で、盛大に開催されました。

お召し船をはじめ、五百隻の大船団が参加して、さながら、海と船の一大絵巻を見るかのように、すばらしいイベントでした。

一 大島の港、中村の港より、海上三里五町。

港の長さ五町、はば二町、岸深く、潮の満干にかま  
いなく、潮かかりよし。

港の口、西の方へむく。

この港より、巳(東南)の方に瀬戸あり。

この瀬戸、船かかり五三間、潮早く、波高く難所、

沖に、「水の子」という島あり。

大島より、海上四里。

この水の子まで、市三郎領分。

この先は、伊豫・伊達遠江守(仙台藩分家・宇和島

藩一〇万石)領分。

ひぶりの島(日振島・愛媛県宇和島市)。

大島より、海上二三里。

水の子灯台は、大分県と愛媛県との県界にあたってい  
ますが、行政区画としては、東中浦村(鶴見町)の管理下

にありました。

遠く、明治三七年、日本でも、有数な灯台として作ら  
れました。

さらに、昭和二六年八月、全国で、始めて無人装置化  
工事が完成し、あたかも、夜の太陽の如く、豊後水道の  
全水域を、あかあかと照らしている。

その維持・管理をまかされていた灯台守。当時、彼ら  
の退息所(鶴見町下梶寄)あとの建物を修理して、海事資  
料館が作られてい  
ます。

そして、当時の  
生活様式そのまま  
の部屋やリアルな  
模型、古い漁具な  
どの貴重な品々が  
展示されています。

また、同じ敷地  
内には、水の子灯  
台に飛来してきた



豊後水道に浮かぶ水の子灯台(平成5年)

六二種、五五〇羽の鳥のはくせい展示された「渡り鳥館」もあって、子供たちに人気をあつめています。

夏になると、ひとときわ、にぎわいをみせるのが、この下梶寄地区。

美しい海岸に、子どもたちの歓声がこだまします。近くには、バンガローもあり、キャンプも楽しめます。

(鶴見町役場・商工観光課)

昭和四四年六月一日、佐伯史談会(四六名)は、「佐伯湾を船で巡る、水の子灯台と鶴見半島突端部の漁村をたずねて」を実施しました。

佐伯市葛港―鶴見町羽出浦―広浦―水の子灯台―大島―梶寄―丹賀―葛港へ。

空は、さわやかに晴れわたって、船で行くには、絶好の日和でした。

○佐伯藩(二万石)の海防と海上交通

波当津浦番所 (蒲江町波当津浦)

蒲江浦番所 (蒲江町蒲江浦)

西野浦番所 (蒲江町西野浦)

小浦番所 (米水津浦番所)

大島番所 (鶴見町大島)

保戸島番所 (津久見市保戸島)

六か所の番所がありました。

いづれも、藩士を巡遣して常駐させて、日夜、海上の監視にあたらせていました。

沿岸を通過したり、港に出入する、他領の船舶を調査してました。(つづく)



### 梅津越

宇目町葛葉と三重町中津留との間にある峠。一般地方道高四五一丁。江戸期は岡藩領木浦鉱山へ至る間道として利用され、明治一〇年(一八七七)の西南戦争では官軍が防

備を固めたと伝える。

峠の自動車道は初め営林署の林道として開かれた。その後、県に移管されて地方道南田原―三重線(現宇目清川線)となった。自動車開通とともに旧道は消え、峠の頂も新道は旧道のやや東側にある。(宇目町誌)